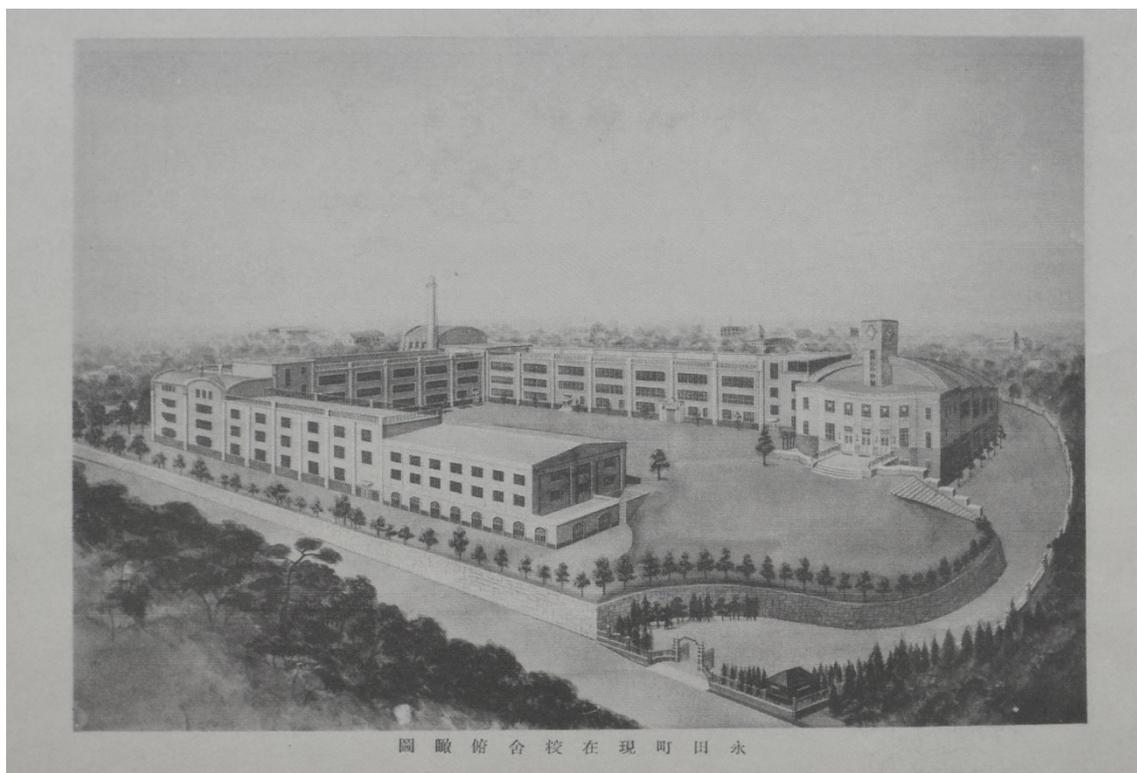


(1) はみ出し組

1931（昭和6）年4月、11歳の加藤は東京府立第一中学校（現東京都立日比谷高等学校）に入学する。当時の府立第一中学校は国会議事堂近くの永田町にあり、学校に通うには、渋谷で市電青山線に乗り、平河町5丁目で下車した。第一中学校は自由主義的な校風ともいわれるが、一方「詰込学校」とか「規則学校」ともいわれ、勉学にも規則にも厳しいものがあった。第一高等学校へ多くの卒業生を送ることで知られていた。いわばその受験予備校的な性格が強かった。



（写真：永田町時代の東京府立第一中学校の全景）

小学校の受験教育は「職人芸的」であり、加藤はまだ年少だったからか、受験教育に疑問を抱かなかった。しかし、中学校の「工業的な技術と組織」をもった受験教育に、加藤は強い疑問を覚えた。それは個性がない大量規格品を産みだす教育だったからである。どんな有

名進学校にも受験体制になじまない「はみ出し組」が必ずいる。「はみ出し組」は、あるいは受験勉強に邁進しない、あるいは校則などを無視する、あるいは運動や趣味に没頭する、あるいは女性に関心が高い「軟派」になる、といった型がある。いずれにしても学校の教育方針に反抗する態度の表れである。彼らは校内の「少数派」である。加藤はまたしても少数派に属することになった。

教育を「人格と人格の接触」とのちに定義する加藤だが、教師とのあいだにも、友人とのあいだにも「人格と人格の接触」を得られなかった。部活にも参加せず、ひたすら自宅と学校の行き帰りの日々を送った。反抗を貫く態度は徹底していて、親しい教師が見つからなかっただけでなく、親しい友人関係も築けなかった。同級生には、のちに哲学者になる矢内原伊作（矢内原忠雄の長男）、同じく『エコノミスト』編集長になる山本進、同じく自然科学系編集者となる高坂知英がいたが、加藤は同級生であったことさえ認識していない。校内には『学友会雑誌』があり、文筆好みの生徒たちが寄稿しているが（丸山眞男も寄稿した）、加藤はついに一度も同誌に寄稿することはなかった。

卒業アルバムを見ると、どこを探しても加藤が写っていない。クラスごとの集合写真にも姿は見えない。撮影時に欠席すると、普通は丸窓で脇に載るものだが、それさえない。おそらく卒業アルバムに自分の写真が載ることさえ拒んだのだろうと推測する。

孤独な5年間を過ごしたに違いない。『羊の歌』では、中学校生活を人生唯一の「空白五年」と名づけた。